

もう何もしたくない

小坂井東小・5年 加藤 恋都

夏休みに入っても、お母さんとお父さんは仕事で、わたしはずつとお留守番。

三時にはお母さんは帰ってくるから、それまで歌ったり、ダンスを練習したり、スマホをいじったり、マジ幸せ。

朝はちゃんと起きるけど、お母さんに朝から、

「日しやったの。」

「作文やったの。」

とか毎日、毎日お母さんとは口げんかしちゃっている。宿題はやりたくないし、考えるのもめんどくさい。家の中にずっといると頭がどうにかなりそう。

お父さんが、何でかは知らないけど、わたしに勝手に病名を付けた。何もやりたくない病だ。

でも、やりたいことはたくさんある。外に出かけたいとか、買い物したいとか、宿題を一日で終わらせたいとか不可能な願望も交じってはいえるけど、とにかくやりたいことはある。最近、何でもくも無気力になってしまっているのか。思い当たるところがある。

それは、ウサギのモコの死だ。あんなにびよんぴよんはねて元気にしていたし、草ももりもり食べていたし、なんでつてすごく思う。だって、元気だったじゃん。お母さんが言うにはじゅ命らしい。急だよ。心の整理がまだできない。どこかの本で見たことがある、心

にあなが空いちやっている状態なのかもしれない。

二年前におじいちゃんのお姉さんがなくなった時、お父さんはとも泣いていた。

そのお姉さんは、結こんしていなくて、子どももいなかったから、お父さんをととても可愛がってくれたみたい。お父さんは数日泣き続けていた。あのこわいお父さんが泣くなんてうそみたいだけど、本当にこんなことがあるんだと思った。

おぼんになってお墓でお参りして、おばあちゃんの家でご飯を食べている時に、そのお姉さんの話になって、お父さんがボソツと言った。

お父さんはそのお姉さんのことをおばちゃんと言ふ。そのあばちゃんかわかいころ、戦時中で、夜ねていると外が明るくて、豊橋の方を見ると昼間のようにもつと明るかったと言っていたそう。空ばくのせいで、豊橋の街がほのおで燃え上がっていた。目をつぶってもその光景は無くならない。いっぱいやりたいことがあったけど、何もかなうことは出来なかったとも言っていたそう。戦争は何もかもうばうとも。

九十八才でなくなったおとうさんのおじいちゃんの話も出た。

戦争に行つて列車でロシアに向かう予定だったのだが、何か手ちがいなのか、名ぼの中におじいちゃんの名前が無かった。おりろと上官に言われて列車をおろされ、別の所に行くことになった(スマトラ島)時に、なみだが出たと言っていたそう。

お父さんがわかい時に、ニュースを見て、

「こんな人間死ねばいい。」
と言いつつ放つた時に

「死んでいい人間なんておらん。」

とおじいちゃんにどなれたと言っていた。おじいちゃんのこととは写真でしか知らないけど、私のお姉ちゃん、お兄ちゃん達は可愛がってもらったみたいで、会いたくなってすごく思う。おばちゃんにも、おじいちゃんにも会ったことがないからさみしい。やさしかったんだろうなってすごく思う。

お父さんから聞いた、おばちゃんの言葉がすごく心に残っている。

「いっぱいやりたいことがあったけど、何もかなわなかった。」

戦争のことは全く分からないけど、その言葉の意味は少しは分からないといけないなって思った。

今のわたしは、とてもめぐまれていると思う。

ほしい物があれば、すぐに手に入れられるし、やりたいこともできる。

でも、それは、お父さんとお母さんが一生けん命仕事をしてくれているからだ。

それなのに、留守番をしている時のわたしは、むだに一日を過ごして終わっている。

今、やらなきゃいけないことは、何もやりたくない病からぬけ出すことだ。

スマホを置いて、何をしなくちゃいけないのかまず考えること。

それから、目標を立てることが大事だと思う。

今、わたしは、ダンスを習っているけど、なかなかうまくおどれなくてなやんでいるので、ダンスの上手な人を観察して、どうしたら上手になれるのか意識しながらダンスをしようと思う。

毎日いそがしくしているお母さんのお手伝いもやろうかなと思う。

自分のできることは、まずやってみるのが一番かなって。
この夏、家族と過ごした時間、これから過ごしていく時間も大切にしたいな。